研究班報告４ Global Studies Working Group

グローバリゼーションに伴う移民問題
—S・ハンティントン博士の憂慮を手がかりにして—

五味俊樹

2005年の夏にイギリスで起こった「同時多発テロ」、そして、秋にフランスで勃発した「一連の暴動」は、今日の世界が抱える深刻な課題のひとつをきわめて劇的に、しかも“悲”劇的に示す出来事であった。その具体的意味合いとは何か。それはおおむねつぎのようなものであると思われる。すなわち、今日の世界では情報技術（ＩＴ）の革命的進歩と輸送手段の飛躍的発達によって、情報、モノ、カネ、ヒトが国境という「壁」を難なく乗り越えて自由に移動することが可能になった。その結果、さまざまな領域においてグローバリゼーションが顕著な形で現われている。ところが反面において、まことに皮肉なことではあるが、各国の内部では、ヒトとヒトとのあいだに「壁」が築き上げられ、広く社会的問題を惹き起こしている。その「壁」が構築される背景には、グローバリゼーションに伴って生じた各国内での貧富の格差や異なった人種、民族、宗教などをめぐる対立があると考えられる。冒頭にあげた二つの事件はグローバリゼーションが既存国家にもたらす「負」の問題を露呈した事例として位置づけられよう。

ところで、この種の問題はまったく新しい現代的事象とは必ずしも言えない。昔からヒトがある国ないし地域を離れて他の国ないし地域へ移動し、そこに定住しようとするケースは見られた。私たちはそれを移民と呼ぶが、その多くは大なり小なり、現地人によって差別、イジメ、そして排斥に遭遇した。したがって、移民の歴史を紐解けば、移民と現地人とのあいだでなんらかの摩擦が生じることはさほど珍しいわけではない。しかしながら、ちょうど冷戦終焉の時期と重なるようにして始まったグローバル化の波は、それまでとは比較にならないほど国境を越えてのヒトの移動が活発になり、移民をめぐる諸問題は各国において避けて通れない主要な課題のひとつになっている。やや大げさな言い方をすれば、国境を越えてのヒトの移動から派生する各国内におけるヒトとヒトとの軋轢は、冷戦後の世界における人類共通の難問のひとつに数えられよう。

歴史の後知恵の謗りを免れえないものの、この問題にいち早く気づいていたのは、ハーバード大学のサミュエル・ハンティントン博士であったのではなかろうか。第二次世界大戦後、約50年余りにわたってつづいた冷戦が終焉を迎えたとき、多くの人々は、世界に「対立」ではなく「協調」の時代が訪れることを夢見た。実際、当時のアメリカでは、冷戦は共産主義の敗北に終わったという認識に基づいて、今後、リベラル・デモクラシーとエコノミック・リベラリズムが地球的規模で拡大し、安定した世界秩序が形成されるであろうとする楽観論が多くの人々によって共有されたのである。そうしたアメリカの支配的見方に対して、アメリカ人ながら、敢然と異を唱えた人物がハンティントンであった。博士は、イデオロギーや経済をめぐる対立が終焉したとしても世界には依然として他の領域における対立の「種」が存在し、決して楽観できないと主張したのである。その「種」の中身が異なった文化・文明をめぐるものだとしてハンティントンは、冷戦後の世界が「文明の衝突」の時代になると予言したことはよく知られている。そして、その予言は21世紀最初の年に起こった「９・11」事件がまさしくそうした意味合いを持っていたと思われる。

もっとも、「９・11」の真相がどのようなものであったかを断定するのは時期尚早かもしれない。現在、私たちはこの衝撃的事件の評価について、多分にアメリカ政府が提供した資料や判断に依拠しているのであり、真実を特定するのに資（史）料の公正さが担保されているとは言いがたい。そうした限界を踏まえつつも、あえてこの事件の原因を探ってみると、ハンティントンが予言したところの要素が含まれていることに気づかされる。たとえば、首謀者オサマ・ビン・ラーディンがアメリカに敵意を抱いたのは、1991年の湾岸戦争終結後においても米軍がサウジアラビアやクウェートから撤退せず駐留しつづけたためだった。なぜならば、ビン・ラーディンは異教徒の軍隊によってイスラムの聖地が汚されていることに怒りを覚えたからである。また、テ

ロ攻撃を受けたアメリカのブッシュ大統領も事件直後に「これは聖戦（crusade war）だ！」と口を滑らせた。この発言は後に撤回されたものの、ブッシュのホンネを隠すことはできまい。いずれにせよ、冷戦後における世界の動向について、文化・文明の要素がきわめて重要になることを指摘したハンティントンの慧眼にはいまさらながら驚かされる。

しかし、ハンティントンの洞察力の凄さはそれにとどまらない。「文明の衝突」論が提唱されたのは『フォリン・アフェアーズ』誌の1993年夏号においてであったが[1]、博士はその論文を基にして、1996年に『文明の衝突』（原題は、*The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*）という大部の書物を著した[2]。著書の大半が世界における「文明の衝突」に関する記述に費やされているのは当然だとしても、興味深いことにハンティントンは最終章において、アメリカ内部に進行する「多文化主義」の傾向に強い危惧の念を表明していたのである。思うに、博士は国際社会全体のことを論じつつも、世界の「小宇宙」の様相を呈するアメリカの国内における「文明の衝突」の虞を誰よりも心配していたのではなかろうか[3]。と言うのは、もしもそれが現実のものになれば、アメリカという国家そのものが分裂しかねない状況が想定されるからであった。

そうしたアメリカの分裂に対する危機意識がハンティントンをして、2004年に『分断されるアメリカ』（原題は、*Who Are We? The Challenge to America's National Identity*）を書かせることになったと思われる[4]。本書の内容は、アイデンティティの視点からアメリカの移民史を振り返り、アメリカのあるべき姿を模索したものである。その結果、博士は、アメリカが普遍的な国になろうと努めるのではなく、アングロ - プロテスタントの文化を中心にした固有の国として発展すべきことを説いたのである。周知のように、アメリカは世界各地からの移民によって造り上げられてきた国であり、今日でも移民の流入は絶えない。世界中どこを見渡しても、人種、民族、宗教などがアメリカほど多様性に富んだ国はない。一般に多民族国家は分裂の虞をつねに秘めているものの、これまでアメリカ国民は南北戦争を例外として、さまざまな困難を乗り越えながら星条旗の下で結束を誇ってきたのである。ところがハンティントンは、ナショナル・アイデンティティを「多様性」にではなく、「一様性」に求めようとしているのであり、アメリカ社会の成り立ちや変遷過程に照らし合わせるとやや奇異な感じを覚える。

アメリカは時代によって、社会のあるべき姿に修正を加えてきたところがある。建国期においては、異なった民族が「新大陸」（ポット）に渡って過去の出自などを「溶かし」（メルティング）て、新しいアメリカ人に生まれ変わることが理想とされ、アメリカを「メルティング・ポット」（人種の坩堝）に見立てたのである。ところが、当時のアメリカは、人口の面で「ワスプ」（WASP）が大半を占めていたために、客観的状況としてアメリカ社会はさまざまな領域において「ワスプ」的性格を帯びていた。19世紀に入ると、生粋のアメリカ人は白人でアングロ・サクソン系プロテスタント派のキリスト教徒だとする「ネイティヴィズム」（Nativism）が台頭し、いっそう「ワスプ」の影響力は増大した。その結果、事の良し悪しはともかくも、アメリカに住むさまざまな「非・ワスプ」（Non-WASP）のエスニック集団は、「ワスプへの同化」が暗に求められていった。そうした「同化主義」の趨勢は20世紀前半までつづくことになる。

ところが、アメリカがヴェトナム戦争で苦戦を強いられる1960年代に入ると、大きな変化が現われる。すなわち、それまでの「ワスプ中心社会」を糾弾し、各エスニック集団の対等性や独自性の尊重が叫ばれようになった。それは「文化的多元主義」（Cultural Pluralism）と呼ばれるイデオロギー性を有する社会運動であった。また、現実のアメリカ社会も「ワスプへの同化」が浸透したとは言えず、それぞれのエスニック集団が個性を保持しつつ、アメリカという国に住んでいるのが実情であった。そこで、建国期の理想であった「メルティング・ポット」論は影を潜め、実態に即してアメリカを「サラダ・ボール」に喩える見方が主流となった。

以後、アメリカでは「文化的多元主義」が比較的多くの人びとによって支持され、裾野を広げながら今日にいたっている。そこにはアメリカへの移民のパターンが変化したことが密接に関係していよう。第二次世界大戦以前におけるアメリカへの移民は移民政策も手伝って、ヨーロッパからの人びとによってその大半が占められていた。ところが、戦後になると、ラテン・アメリカ、アジア、そして中東からの流入が相対的に増え、アメリカの人口構成が変貌を遂げる。その結果、

非ヨーロッパ系の人びとの発言力が高まり、逆に「ワスプ」の優位は後退を余儀なくされたのである。

現在のアメリカ社会が抱える苦悩のひとつはまさにこの点にあろう。すなわち、今後、「文化的多元主義」が支配的価値として定着することになれば、これまで培ってきた「アメリカ的なるもの」=「ワスプ的なるもの」は老化の一途を辿り、やがて非ヨーロッパ系の人びとによってアメリカ版「姨捨山」に葬り去られることもありえよう。そうした事態の推移を憂慮したのが、古き良きアメリカをこよなく愛するハンティントン博士であった。

ところで、新移民の文化と旧移民のそれをどのように織り合わせるかは、決してアメリカ特有の課題ではなかろう。たしかに、アメリカは移民国家ゆえにそうでない国と比較すれば、深刻の度合いははるかに大きい。しかし、グローバリゼーションによって、たとえ非移民国家であったとしても、この問題からもはや逃れられないのである。イギリスの「同時多発テロ」もフランスの「一連の暴動」も、そうした文脈の中で捉えられなければならない。実際、2005年11月9日付の『読売新聞』は「スキャナー」の欄において、「多文化主義」をとるイギリスで同時テロが起こり、「同化主義」を推進するフランスで暴動が発生した、という視点から両事件の問題点を整理していたのである。

こうしてみてくると、グローバル化の荒波の中で、異なった属性を有するヒトがある国へ流入し、そこで生活を始めた場合、その国はそうしたヒトにどう対処すべきかが、いまや万国共通のテーマであることが理解されよう。ただし、現状では従来の対処方法である「多文化主義」も「同化主義」も、移民の流入から派生する社会的病を癒す特効薬になっているとは言いがたい。したがって、その対処方法について、私たちに突きつけられた研究課題はきわめて重いものがある。

[注]

(1) See, Samuel P. Huntington, "The Clash of Civilizations?" *Foreign Affairs*, Summer, 1993.

(2) サミュエル・ハンチントン著、鈴木主税訳『文明の衝突』集英社、1998年を参照。ただし、原書は1996年に出版されている。

(3) 厳密に言えば、この種の見方はハンティントンによる専売特許ではない。歴史家のアーサー・シュレージンガー、Jr. は『アメリカの分裂』のなかでつぎのように述べている。すなわち、「異なる言語を語り、異なる宗教を信仰し、民族起源を異にする人びとが、同じ地理的地域に居住し、同一の政治的主権のもとで生活するとき、一体そこに何が起こるであろうか。ひとつの共通の目的が人びとを結びつけえないのであれば、部族的な敵愾心が人びとを離れ離れにしてしまうだろう。」(アーサー・シュレージンガー、Jr. 都留重人監訳『アメリカの分裂』岩波書店、1992年、2頁)

(4) サミュエル・ハンチントン著、鈴木主税訳『分断されるアメリカ』集英社、2004年を参照。